Title	碌山の言葉 "LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY." の考察（後編）
Author(s)	喜田, 敬
Citation	聖学院大学論叢, 11(4): 43-64
URL	
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

碌山の言葉 “LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY.” の考察（後編）

喜田　敬

Rokuzan's “Love is Art, Struggle is Beauty.” (Part Ⅳ)

Kei KIDA

The purpose of this thesis is to consider Rokuzan's real intention when he wrote in English, “Love is Art, Struggle is Beauty”, retracing the steps of his faith and his art.

本論は，碌山の信仰と芸術の歩みをたどりつつ，彼の書き残した英文の言葉 “Love is Art, Struggle is Beauty” の真意を考察することを目的とする。

（前編）

第１章　英語であること

第２章　井口喜源治との出会い

第３章　二つの学校

第４章　碌山の受洗

第５章　What is Art

第６章　肉の剣と霊の剣

（以上は聖学院大学論叢　第６巻，1994年に掲載）

（中編）

第７章　碌山の革命観

第８章　留学生碌山

第９章　近代日本彫刻の父

（以上は聖学院大学論叢　第７巻，第２号，1995年に掲載）

Key words; Desperatio fiducialis, Naturalism, Divine Revelation, Rigorism, Slave's Struggle and Freeman's Struggle, Conversion, Freedom

（中編Ⅱ）

第10章　Life is Beauty

第11章　碌山の観た日本の美術

第12章　「ストラツグル」

（以上は聖学院大学論叢　第9巻第2号1997年に掲載）

（後編）

第13章　「デスペア」

第14章　「女」

第15章　「眠りについた碌山アート」

第16章　「碌山と黒光と明治女学校」

第17章　「碌山と川井運吉」

終　章　“Love is Art, Struggle is Beauty”

第13章　「デスペア」

「僕は一時精神的に死なんとせしが尚旦夕の命を保つ。享楽の半面は悲哀也吾人の行動は日暮れて谷間をさまよふ旅人の如く足さぐり也。」(1) 1908年（明治41年），碌山は苦悩と疲労の中で「デスペア」（写真１）の制作に取り掛かった。後年石井鶴三は，この絶望の像について，「荻原作のうちで，感動が淺いかと思われる。幾度も見ているが心にひゞくものが弱い。女體は丁寧に寫されているが，絶望感を作中に籠めようとして，その爲め造型を弱めるところがあつたのではないか。作者もこの作は氣に入らなかつたようである。」(2) と記し，笹村草家人は，「自然の描寫がこの作では消極的追隨に終つた不透明な弱さ鈍さになつてゐる。……彫刻の研究に行悩んでいた頃の作で絶望（デスペア）という題は，ポーズ上からの命名で人生觀上に絶望した謂ではない。」(3) と批評した。確かに「作者もこの作は氣に入らなかつた」。だが，「ストラツグル」の時の様に制作を中止することはなかった。「デスペア」は翌春完成し，そして10月，碌山はこれを第３回文展

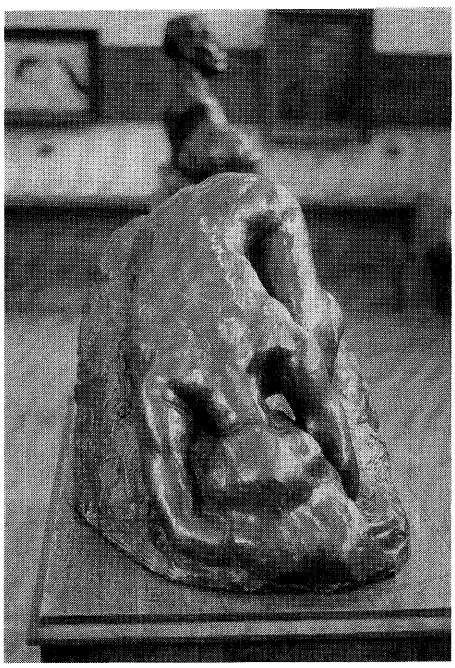

写真１　荻原守衛「デスペア」ブロンズ
「碌山美術館所蔵」

に出品した。黒光は当時を回想し，「『デスペャー』は文展では落選したのです。……その後太平洋畵會に出しました。」[4]と記している。黒光のいう太平洋画会展は，1910年（明治43年）５月に開催された第８回展であったと推測出来るが，この時碌山は既にこの世を去っており，同展では，碌山の遺作陳列室が特別に設けられたと記録されている。黒光の記述と事実との微妙なる異なりであるが，これは黒光が「デスペア」に執着する碌山を身近に見ていたためと考えてよかろう。

「絶望（デスペア）という題は，ポーズ上からの命名で」はなかった。笹村自身も後に，デスペアは「今もそのスケッチが遺っている。あの作には人の気付かぬ事が附帯する。それは，あの作は決して軽く取りかかったものではないという一事で，彼の没後まもなく上梓された博文館の『彫刻真髄』をみると，口絵に試作（エスキース）とみられる石膏像の写真がのっている」[5]ことに気付く。黒光は，「娘の千香（ちか）が足首をおさえてかゞむのを碌山はみて，一つのポーズを考えたやうでした。……そうする處を見て『デスペア』のポーズがきまりました。」[6]「そのポーズを成人のモデルにさせても違ふので困つたやうでした。蒲團を積んでポーズをしました。」[7]「だがその作は思ふやうにいかず，ロダンの作に似てゐるから嫌やだ嫌だと云つてゐました」[6]という。碌山が光太郎へ送った書簡の中には，次の様な一節があったという。「今日は怪しげなる女モデルに来る。……立たせてはソレハソレハ見ごとの線をなす。僕はデスペアをやらんとして横にねかしたらロダンのデナイの様になつてしまつた」[8]。碌山はまず，題名を決めていた。そして，そのポーズは「幼稚園へいつてゐた」[9]黒光の娘の癖から考えついた。だが，「成人のモデルに」幼女のポーズは無理であった様で，自然とロダンの「ダナイード」のようになってしまった。絶望を表現するのに，楽なポーズは有り得ない。黒光は，モデルが「打伏すと髪の毛が一本ぬけた二本ぬけたと云つては苦にしてゐ」[7]たという。碌山自身も本多に，「モデルが頭を下にするのを苦しがつて二十分とポーズが續かない，もう實は匙を投げてるんだ」[10]と語ったという。苦しいのはモデルばかりではなかった。「盲目。恋のみに限らず，人生も盲者の如し。僕は帰つて来た。何か活動を試む可く。しかし天はよく出来て居る。」[1]。永年の無理が祟り，碌山は心身に変調をきたしていた。この頃彼は「皮膚病」[8]を患い，亜砒酸を服用するようになる。だが彼の不安は肉体以上に精神にあった。ノイローゼではないかという恐怖が蘇る。そしてこの苦しみが，天命に適わぬ自らの生き方にあるのではないかという思いが過った。

1936年（昭和11年）の光太郎の詩「荻原守衛」の中には，次の様に有る。「粘土の『絶望』はいつまでも出來ない。『頭がわるいので碌なものは出來んよ。』荻原守衛はもふ一度いふ。『寸分も身動きが出來んよ，追ひつめられたよ。』」[11]。友人光太郎は，碌山の言葉と胸の内をここにつづった。「僕は頭が病んでゐる。或は永久に治らぬかも知れぬ。だから痛快なものは出来ぬ。」[8]。「午前は今の処デスペアをつゞけて居る。しかしうまく行かぬがうまいと信じてやつてゐる。心神病在り，仕事がうまく行くものか然しやらねばならぬ」[12]。神経の衰弱する中，碌山の「粘土の『絶望』はいつまでも出来な」かった。だが碌山にとって「粘土の『絶望』は」「やらねばならぬ」作品であった。

三原清一は，「デスペア」の完成する頃のことを，次の様に証言している。「私の母が荻原の家の縁家先になつて居りましたので私や弟の林市は守アニ守アニと云つてゐました。碌山が歸朝した頃弟は商船學校の學生で大成丸にのつてゐてよく東京へ來ましたから碌山や相馬さんとも親しくして居まして，ある時打合せて角筈のアトリエを私が訪ね弟は一足あとから來ました。その時等身大の『デスペヤ』が粘土のまゝでできてゐまして見せて貰ひましたが弟の話によりますと，前にも一つ別の同じやうな作ができてゐてそれを弟が見せて貰つた時「これは何んだね」ときゝましたところ「何だといはれるやうではだめだ」と云つて壞して終つたそうですから，私の見たのは二度目の作だつたらうと思ひます。」[13]。三原の証言からは，碌山の「デスペア」に対するすさまじい執念が読んでとれよう。

大木英夫は，説教「義にして同時に罪人」の中で，「絶望には二種類の絶望があります。一つは傲慢な絶望，他は「信頼の絶望」であります。絶望それ自体が悪いのではありません。自分に絶望して神を信じるということがあるのであります。」[14]と語った。言うまでもなく「信頼の絶望」はルターの言葉である。碌山のルターとの出会いは，恐らく1899年（明治32年）７月29日にあったと思われる。その日の日記には，「小川にてルーテル傳，ルツ記，傳道の精神，愛吟，四種を求む。」[15]と記されている。この日，碌山は内村鑑三の著書と共に，村田勤訳のルターの伝記を購入したのである。８月１日には，「ルーテル肖像をかく。」[16]とある。この年の日記からは，20歳の碌山がルターに魅了されたことが読んでとれる。生涯において碌山が，どれほどルターの思想の深みへ踏み込んだかは明らかではない。ただ確かなことは，絶望的状況にあって碌山は，絶望の像の制作を試みたことにある。「天はよく出来て居る」，この一点が彼を「デスペア」制作に駆り立てた。

「デスペア」は，碌山の絶望の叫びであった。彼はどうしても，これを造形化しなければならなかった。「うまく行」かなくても断念出来なかった。では，「デスペア」の制作によって，彼は心の平安を取り戻したであろうか。神への信頼は深まったであろうか。我々が目にすることが出来る事実は，「デスペア」の次の作品「北条虎吉像」（重要文化財）に現われる。碌山は元来自由な制作よりも，肖像彫刻を得意としたが，「北条虎吉像」は，彼の肖像作品中最高の傑作となった。そして，これ以後絶作となる「女」（重要文化財）までどの作品にも，碌山アートの輝きは蘇ったのであった。これを「デスペア」の失敗の教訓から会得した成果だと見るべきではなかろう。「デスペア」は造形的には碌山の失敗作である。だが「人の気付かぬ事が附帯する」重要な作品でなのある。

第14章　「女」

「女」（写真２）は黒光の像である，と信じられて久しい。その原因の一つには，この作品の顔（写真３）が黒光に似ていることにある。碌山研究の功労者ともいえる笹村は，「二十年も前に初めて芸術大学で碌山の彫刻展を催したことがあった。会場で責任者として立っている私の正面に，や

写真２　荻原守衛「女」ブロンズ
「碌山美術館所蔵」

写真３　荻原守衛「女」ブロンズ
「碌山美術館所蔵」

や離れて『女』の石膏像があった。その向うの入口の階段から，介添えをうけながら白髪の黒光が昇ってきたちょうどその時の，『女』の顔と黒光その人の顔とが偶然同じ方をむいていた。私は思わず息を呑んだ。八十に近い年寄りになっても黒光の顔や骨格の感じが「そっくりだ」と思われたからで，黒光もその時の事を「この年になってもあの像を見た時は，身を締めつけられる思いがした」と後に私へ話した。」[17]と回想している。黒光は，1955年（昭和30年）80歳でこの世を去っているので，最晩年の話しである。いま一つの原因は，黒光自身が，「女」を自分であると信じたことにある。そして執筆に際し，黒光は繰り返し，このことに触れるのであった。前述の『默移』續篇には，「今は主人なきアトリエに行き，中に這入つて見ますと，故人の作品は今は累々たる屍のやうに見えるのでした。その中に絶作となつた『女』が彫刻臺の上に生々しい土のまゝで，女性の惱みを象徴してをりました。私はこの最後の作品の前に棒立ちになつて惱める『女』を凝視しました。高い處に面を向けて繋縛から脱しようとして，もがくやうなその表情，しかも肢體は地上より離れ得ず，兩の手を後方に廻したなやましげな姿體は，單なる土の作品ではなく，私自身だと直覺されるものがありました。胸はしめつけられて呼吸は止まり，私は，もうその床の上にしばらくも自分を支へて立つてゐることが出來ず，」[18]と記している。また『碌山のことなど』には，「絶作になった『女』は女性の惱みの絶頂をシンボルしてゐるものだと思ひます。足が地について立上れないあの姿をみて私はじつと正視してゐられませんでした。あの像の顔をみて山本安曇さんは私に

「誰の顔を作つたかわかるぢやありませんか」と云ひました。」[6]とある。いずれの文章においても，黒光は「女」と自分の容貌の類似について直接触れることは避けた。黒光が強調したのは，「女」が女性の悩みの像であり，そして自分である，ということであった。では黒光は，『黙移』續篇に記したほど苦悩に満ちた生涯をおくったのであろうか。ここには多分に，幻想化された悲劇のヒロイン黒光が感じられてならない。

1956年（昭和31年），相馬安雄は，黒光の遺稿をまとめ，『滴水録』を出版した。以下は安雄による序文の一部である。「黒光ぐらい生涯を通じて自己の思いの儘をやってのけた人は稀であろう。総ての言動が自己中心に為されている。少くともわが邦の女性として，且また人の妻女でこれ丈け自由奔放に振舞った者は珍らしい。……が併し伜として常に父と共に母を同時に観察する機会を有した私の眼から見れば，母の自由奔放さは稀に見る寛大な父の性格に因るものであった。それは母の察知出来ない程の大きさであった。恰も孫悟空に対する仏掌の如き関係であろう。」[19]。

さて，「女」のモデル岡田みどりについて，1954年（昭和29年）79歳の黒光は次の様に証言したという。「『女』のモデルは顔色の蒼黒い何となくしまりのない顔と肉體のやうに記憶してゐます。……山本安曇などは『女』を指して奥さんそつくりではありませんかなどゝ私に云つたと思ひます。」[20]。晩年も黒光は，「女」が自分であることを印象付けようとした。岡田について黒光は，「何となくしまりのない顔と肉體のやうに記憶してゐ」るという。そして，ここでも「女」をブロンズに鋳造した東京美術学校学生，山本の言葉を繰り返すのであった。だが黒光は，岡田の顔が「女」の顔と似ていない，とはいえなかった。

愛蔵の死（1954年）後，黒光は「碌山にこのやうな悩みを與えたのは私であることをはつきり申しておかなくてはならぬ義務があると思ひます。」[21]と告白した。愛蔵については，「性のことといふものはどうにもならぬ處があつたとみえまして，そのことでは當時もその後も問題がいつも外にかくされてゐて，そのために私は自分の悩みをじつと押え悶々の裡にありました。」[21]と記した。自分の悩みの原因は，夫の裏切りにあったというのである。碌山との関係については，「ある時愛蔵がそれを碌山に打ちあけましたのです。それで私の煩悶がわかつて非常に碌山は私に同情するやうになりまして，そこが性の違ふ者同志ですからそこに生じた愛情に互に苦しむやうになりました。」[21]と記し，自身について「私の性質として手をたづさえてつッ走ることは譯はない，しかし家庭といふものにはいろいろの事情がありまして，それをどうやらこうやら壊さないで主人をも許るしここまで持つてきたといふのが私の眞情です。」[22]と記した。だが，ここには黒光の自己を中心とする虚偽にも近い誇張があった。悪意があったわけではなかろう。黒光はその生涯において，見たいものを見つづけたのである。黒光の告白は，事情を知らない人々に衝撃をあたえたるのに十分であった。保田龍門は，1955年（昭和30年）２月，笹村に宛た書簡の中に，「黒光女史の始めての發言で碌山との愛の問題についていろいろ考えさせられます。……明治に生を享けた人々の脱けきれぬロマンチシズムの悲しい因果だと諦める外ありません。」[23]と記したという。黒光にとって，

碌山の最高傑作「女」は自分でなければならなかった。自分であると信じた時から，人々はそれを知る必要があると思った。「女」が存在する限り，黒光は語りつがれなければならないと考えた。悲劇の「女」黒光として。

淀井敏夫は，講演の中で次の様に語った。「むかし石井研究室編纂の『荻原碌山』を笹村草家人さんからもらったとき，その本の扉に〈女〉の像からかと思える胸像の写真が載っていました。この胸像はどうしたの，と笹村さんに聞くと，「黒光さんが碌山の〈女〉の像の顔のあたりだけにしたものが欲しいといわれるので，型取りして切ったのだ」と話してくれました。」[24]。碌山は黒光を愛した。だが黒光は，碌山に愛された自分を愛した様に思われてならない。

岡田にとって「女」は，初のモデル体験であった。碌山が岡田を起用した理由は定かでないが，恐らくポーズ慣れしたモデルを避けたかったのであろう。いま一つには「女」の制作にあたり，純粋さにこだわった可能性が考えられる。前述の光太郎への書簡では，「デスペア」の為に雇ったモデルの肢体の見事さがつづられていたが，そこには同時に「日本の女，特にモデルでもやり相な女にろくなものなし」[8]とも記している。津田青楓は，岡田が次の様に語ったと言う。「わたし裸體になんかなつたことがなかつたんだけど，荻原さんが無理になれなれとお仰るもんだから，とうとうなつちやつたのよ。」[25]。岡田が「女」のイメージに合ったのであろうか，執拗に説得する碌山の姿がうかがわれる。

さて，「女」は女性を用いて表現した碌山自身であるが，その顔はモデルの岡田であったのか，思い人黒光であったのか。もし黒光であったとすれば，何を意味するのか。彼の深層には何があったのか。単なる思慕の念なのか。それとも黒光の回心の碌山の願望であったのか。

第15章　眠りについた碌山アート

「僕は『此から彫刻に面白い世の中になるぞ』と思つて嬉しさに堪へられなかつた。實際面白い世の中になりかけた。足はまだ面白い世の中に踏み込んでゐないでも眼の前に見えてゐた。それがふつと消えたのである。為方がないといふ言葉は實に慘酷な言葉である。」[26]。碌山の突然の死に，光太郎が記した言葉である。画家斉藤与里は，「敬愛する吾友は實に私共の指導者であつた荻原スクールと後世に伝はるべき一派の指導者は中途にして倒れたのである」[27]と嘆いた。だが戸張は，「安らかに逝つた君の死は無意味の死ではない一粒の種子の死である早晩氏の云はんとし尽さんと欲した其目的は花となり然して幾多の實となるであらう，」[28]と記し，自らイラストレーターを辞して彫刻家へと転身するのであった。1953年（昭和28年），石井は当時受けた印象を回想し，「荻原さんが死なれると，途端に戸張さんが彫刻家になつて終いました。戸張さんは無論碌山の彫刻作品を見ていたし，彫刻に關心を持つても居られたでありましようが，それまで彫刻の制作はやられなかつたのであります。だからその戸張さんが第一作を出品した時私どもはこれは戸張さんの作じや

あるまい，これまで餘り感心出きぬ挿畫をかいてゐた戸張さんにこんな立派な彫刻を作れる譯がない，恐らく戸張さんは荻原さんと親友だつたから碌山の作品に戸張といふ名を附して出したものではあるまいかなどと失禮なことも思つたのでありました。」[29]と記した。戸張の心中には，荻原スクールは継承されなければならない，という強い思いがあったのであろう。1910年（明治43年），戸張の初彫刻作品「をなご」は，碌山の「女」と共に第４回文展に出品されたのであった。しかし，戸張が願ったほどには，多くの実はならなかった。戸張はその原因を，「要するに之れは美術館を持たぬ事と碌山によつて覺醒した後進者が數少きこと，同じ主張にある人達があまりに世評に恬淡な事に衣る」[30]と考えた。笹村は（その結果）「碌山の『女』がこれだけの姿態（ポーズ）を示しているにもかかわらず，その後もここに思いを致す人体彫刻は殆ど現れていない。バレリーナか何かのやりそうな妙な姿態に，思わせぶりの題名をつけた官展のそれに対して，これを嫌った院展のそれは，日常生活の一端をただ写すという消極にとどまって，姿態（ポーズ）の示す積極性というものは全く考えなかった。」[31]という。石井は更に，碌山の作品が理解されなかった理由の一つに，フランス留学中の習作（的でない）「坑夫」（写真４）（「綱をひく男」）を例にあげ，1908年（明治41年）「この作が文展の鑑査にかゝつた時，審査員の一人は，「これはまだ仕上つていません」と云つたという。物形模造を彫刻と考えていては，かくの如き言をなすのも無理のないところであるが，……「仕上つていません」といつて，こういう生命ある彫刻をしりぞけたのは昔の笑話と思つていたところ，今日に於てもそれが名ある人の言として時々聞くことがあつて驚くのである。物形模造の悪弊はなかなか根絶し難い。」[32]と批判した。因みに，「今日」とは，昭和30年頃の事である。碌山の「生命の藝術」は，目や耳や手から容易に学ぶことの出来るものではなかった。「アートは単に努力ではない，単に勉強ではない，」[33]。碌山のアートは，碌山の生き方にあった。そして光太郎は，このことを知っていた。「為方がないという言葉は實に惨酷な言葉である」。

写真４　荻原守衛「坑夫」ブロンズ「碌山美術館所蔵」

「日本彫刻の如く静の一辺に偏し，或は歐洲彫刻の如く動の側に局することは果して其当を得たものであらうか，否，この両者は共に未だ不完全なることを免れぬものであつて進歩の理想としてはどうも，この両者を円満に具足したものでなければならぬ，」[34]。ここに碌山の一つの理想があった。ロダンは碌山「の製作には運動（ムウヴマン）があつた。生々して居た」[35]と語ったという。碌山の作品に

は，ロダンが時として好んだアクロバティックなポーズはない。また仰々しいムーヴマンもない。「女」には，バランスを崩す手前で目に見えない力が支え上げるかの様な，微妙なムーヴマンが存在する。このポーズには，碌山の主題が見事に現われている。だが，碌山の「生命の藝術」は，ムーヴマンの有無を意味しない。「北条虎吉像」が，それを証明している。では，「女」は，「進歩の理想」の試みであったのか。

碌山の試みはグローバルなものであった。だが日本はこれと逆の方向へ歩みはじめる。1918年（大正７年）７月，戸張は『現時の彫刻界』の中に，「日本政府が眞に藝術を奨勵せんとなれば各自の人格それ自身を承認しなければならぬ筈である。併し靜かに考へる時意義ある藝術の興ると云ふことは今の場合非常に困難なこと、言はねばならない。日本の文化は國是は今の所個性を承認するよりは個性を壓迫し寧ろ模倣を奨勵して居るからである。材料使用の自由は必ずしも眞の意味の藝術と何等の關係はない。思想の自由があり批評の自由があつて始めて端緒が開かれる。日本には眞の意味の批評と云ふ事が承認されて居らぬ。文字はありながら批評の意味は許されて居ない，抹殺して居る。斯かる國土に藝術の發達する餘地は有る筈はない。」[36]と記した。デモクラシィーとアート。戸張は，人格，個性を承認しない政府が「模倣を奨勵」するのだといい。思想，言論の自由なき「國土に藝術の發達する餘地は有る筈はない。」と論じた。若き日，戸張の英語の師は片山潜であった。片山の私塾からは，「15，６人の生徒の内14人が渡米した。」[37]という。戸張も，その１人であった。戸張の社会意識の中には，恩師片山とアメリカ留学の影響がうかがわれる。

1914年（大正３年）第８回文展に入選した戸張の作品「犠牲者」は問題となった。11月に戸張は次の様に記している。「正木美校長から是非逢ひ度いと云ふ使ひがあつたので行つたら文部省の教育課長とやら云ふ役人が居て，『犠牲者』は文展に氣づかずして入選さしたが彼の幸徳事件の連類者として死刑となつた菅野スガ子であらう頬骨が突き出てゐるから彼女であらう。彼女に似て居ると云ふので諸方からやかましくて困る，との話しがあつた。桑博に出陳するのに氣の小さな人は心配して居るらしい……」[38]。戸張はこれを否定し[39]，「犠牲者」はサンフランシスコ博覧会に出品された。戸張孤雁（本名亀吉）の孤雁は号であ。本来群れをなす雁が，一羽群から離れて生きることを意味するのだという。その号の示すとうり，彼は生涯批評しつづけた。「日本へ産れてならぬものが二つある。一つは藝術家，他の一つは苦學生。藝術家は宜敷く佛蘭西あたりへ生れるといゝ。苦學生は亞米利加へ行け。」[40]。戸張，この年５月の言葉である。

「昭和十九年の春，所謂当時の改組で東京美術学校の実技教官の大方が入れ代って彫刻科の教授に石井鶴三があげられた。サイパン陥落の直前のことであったが，学生はみすぼらしい姿も気分も時の圧力でひしがれていた。石井教授が学生への第一声として云ったことは，日本の近代彫刻は碌山，光太郎に始まるという一言であった。これは永い永い美校彫刻科の伝統にとっては全くの切替えであり，学生にとっては光太郎はともかく，碌山という名は知らぬ者が大方だったろう。」[41]。「舊來のラグーザ系統の彫刻に代って，始めてロダンから碌山，光太郎が受入れてきた近代彫刻へ

の切りかへをなした譯で，その秋石井教授は『現代日本彫刻の主流について』といふ話をして碌山，光太郎に發するものこそ本格の流れであるといふマニフェストをしたのである。」[42]。これらは笹村の証言である。そして敗戦。笹村は碌山資料収集に着手するのであった。現碌山美術館副館長荻原孝子[43]は，敗戦の翌年，碌山の実家へ「ひょっこり相馬愛蔵さんが見えて『これからは平和な時代となり国民は芸術に目を向けるよになる。碌山の作品も日の目を見るような時代が来るからしっかり守って下さい。』と申されました。」[44]と回想している。そして，その様になった。

碌山の作品には全体主義的な社会には受け入れられにくい人間性があり，その社会では学ぶことが，育ったことが困難な芸術性があり，そして，その社会に適合しない彼の生き方があった。

第16章　碌山と黒光と明治女学校

「亜米利加はですね，僕等は初め想像した時には，自由の国だと云ふから，先頃日本で非常にやかましく騒いだ例の自然主義の国民だと思って行ったのですがまるで想像が外れて，自由と云っても実に厳格の意味においてので，男女の交際なども正しいものです」[45]。帰国後の碌山が，雑誌『商業界』の記者，森田生に語った言葉である。アメリカが自由の国であることは，多くの日本人が知っていた。だがその自由が如何なるものかを知る日本人は少なかった。留学前の碌山の予想も否定的なものであったが，実際に渡米して，自由の質の違いを知ったという。碌山はここで，「僕等」と一人称複数で語ったが，森田の記録が正しいとすれば，同一の体験をし，見解を共にする仲間がいたことになる。碌山(達)がアメリカ人に対し抱いていた誤解は，「自然主義の国民」ということであった。碌山が彫刻において，自然を語る時，日本の文壇における自然主義と一線を画した[46]ことは『彫刻真髄』にも記されている通りであるが，ここで注意を要する点は，自然主義を代表する藤村と，藤村が教鞭を執った明治女学校との関連から，碌山の批判の対象となった自然主義と明治女学校とを結び付けて考えることが，適当であるか否かにある。

1899年（明治32年）10月，上京した碌山は11月５日「不同舎へ入塾」[47]し，巌本善治の信頼を得て明治女学校内に住むことになる。そして，12月18日には井口喜源治に宛て，「菓子屋の小僧菓子をくはすで，予の如き多情の青年独り女学校に置く事は予は愛(いと)しむべし。先生御心配被下ならんと心苦しく候共，ものになれば却て之れ迷想する事なし。うゑたるものは粗食をも厭はず，然れど食豊かなれば食を思はずに候。我は極めて女子と交るを好む。而して我には男女両性の考へ殆ど無え様な気がいたし居候」[48]と書き送った。碌山の言葉に偽りはなかった。だが彼の存在は，当然女学生の関心を引くところとなる。翌年５月，深山軒に移った碌山は，７月13日井口宛の書簡に，「夕刻いただける書面の返事かくべく机に向へば，散りかけありし花瓶は誰が心づけにや，美しき花と変て居る。先生よ，我はかかる楽しき境遇にあるを得しは誰が為ぞ。」[49]と記している。やがて彼女達の中からは，碌山に対し好奇心以上の感情を抱く女学生も現われて来る。渡米後，美術の道を

進むべきか，神学の道へ転ずべきかを悩んだ碌山に，「是非共画に依て立つべし」[50]と書き送った片岡鐵兵（まさ）を，碌山は「最親友」[50]という。恐らく片岡ほど碌山を理解し，愛した女性はいなかったであろう。片岡とは別の，そして積極的な近づき方をした女学生達がいた。渡辺泉と清水豊野である。碌山郷里の酒造家嶋屋（しま）の三女であった望月菊のは，1954年（昭和29年）10月，54年前の事を回想し，「井口喜源治さんと相馬愛藏さんが嶋屋へこられて私を明治女學校へ入るやうにおすゝめがあり，十五の年（数え年）の九月に東京から碌山さんが迎へにみえ母と三人で舟で犀川を下つて篠井から汽車で上京しました。……私は渡邊さんと寄宿舎で同室でしたがいつも夜になると渡邊さんからいぢめられました。渡邊さんは清水さんと競爭のやうにして毎晩深山軒へ押掛け門限のない學校でしたが寄宿へ歸るのはいつも十二時一時でした。碌山さんにきくと毎晩おれがアメリカへゆく支度をしにきてくれるんだとのことでした。……私は渡邊さんにいぢめられるもので碌山さんの渡米を待つてお茶の水女學校へかわりました。」[51]と語った。望月の世話を渡辺，清水に托したのは碌山であり，望月の入学は碌山の渡辺，清水との交流をます結果となった。1901年（明治34年）10月，碌山はニューヨークから井口に宛，望月「は裁縫，琴，茶など云ふ雅の方を修めんとして，渡辺，清水姉などはそれらは後廻しにして先づ学科の方に重きをおけとの意見なりしが，最も折合はぬ初めなりしなり。」[52]と書き送った。両者の折り合わぬ切っ掛けはここにあったのであろうが，勉学を強いる先輩達が，碌山と親しく交際することは，望月の気分を害したであろう。14歳の少女には，まさに「いぢめ」であった。「可愛ゆきは菊の子なり。罪深きは我なり。彼女の涙は我充分に之を解せり。……弟は初め非常に世話せしもとは却而（ママ）（かへつて）よろしからずと存じ，放任してと存ぜしか彼女の感情を害せしなり。とにかく弟の愛の足らざりしは彼女をして彼の校を去らしめ所以に候。」[52]。幼さから来る誤解であったにせよ，望月は生涯渡辺の仕打ちを忘れていない。碌山は，望月の悔しさを思う時，自らの思慮の浅さ，罪の深さ，愛の欠落を感じて悲しかった。碌山は節度ある態度をとっていたが，女学生との交流は，後に誇張が加わり曲解され，明治女学校にとって不名誉な逸話として伝えられるようになる。

1943年（昭和18年），中村秋一は碌山についてのエッセーを雑誌『畫論』に連載したが，９月号（第24号）には明治女学校と碌山について以下の様に記している。「なにしろ，男女の交際がほとんど異端視されてゐた明治末の，男女七歳にして席を同じふせぬ遺風未だ濃やかなる時代に，獨身の男が女學校内に住んでゐるのも妙だが，それを許した校長もよほど變つてゐる。しかし巖本校長は過渡期にあり勝ちな急進的戀愛至上主義者の一人で，そのために没落したひとであり，またかうした傾向が當時の『新しい』風潮であつたことは藤村の『春』にでてくる岸本と勝子の姉弟間に於ける戀愛を見ても頷けるし，有美，透谷，藤村の實生活のなかにも見出しうる。しかし，小山菊野[53]も書いてゐるやうに，『深山軒の若い男』は當時の女學生の好奇心をかなりまでそゝり，小山が談つてゐるやうに深山軒を訪れる女學生も決して尠くはなかつた。これに對して二二歳の荻原がいさゝか當惑してゐたことは，外遊に際して『どうもあそこにゐると，身に危險を感じるから……』

と洩らしたことによつても頷けよう。」[54]。戦時下にあって尚，碌山研究が為されていたことは特筆に値するのだが，巌本を「急進的戀愛至上主義者の一人で，そのため没落したひと」とし，青柳猛(有美)「の實生活のなかにも見出しうる。」とする中村の論調には，この時代の思潮が色濃く反映しているといえよう。小山は事実を語った。だが中村の論説は，明治女学校の退廃思想を強調することによって，その結果碌山の留学の目的が非倫理的環境からの逃避を印象づけるものとなった。巌本，青柳に対する認識，評価が斯のごとき時代，如何なる資料を用い研究を行なおうとも，碌山思想の中核に迫ることは到底不可能であったと言わざるをえない。

周知のとおり，明治女学校校長巌本はまた，『女学雑誌』の発行責任者でもあった。『明治女学校の研究』の著者青山なをは，この『女学雑誌』における巌本の社会「批判が目立つて痛烈になるのは日清戦争後で，」[55]明治維新における四民平等「の理想を失つて，次第に矛盾撞着にまみれてゆく世の低俗化に，卑俗化に，ゐたたまれない焦燥に捕へられたのは，彼が女子教育界に身を投じてゐたために，特に経験した環境からの刺戟によるのであつたかもしれない。」[56]と推測している。「なほ，『女学雑誌』には，廃娼運動その他重要な婦人問題が，とりあげられてゐるが，」[57]中村が巌本を「急進的戀愛至上主義者の一人」と考えたのは，教育思想のみならず，四民平等の立場から広く婦人問題を論じたためであろうか。確かに巌本は，反体制的存在とはなっていたが，ここには，黒光とその著書『黙移』からの影響がうかがわれてならない。

黒光は明治女学校の卒業であるが，同校には，九段坂下時代，麹町下六番町時代，巣鴨時代があり，黒光が学んだのは，麹町下六番町時代であった。『黙移』には，「明治女學校の全盛期はこの下六番町時代で，その頃は三百人位も生徒があつたと聞いてをります。私が入りましたのはその全盛期が過ぎてからで，生徒も百人位になつてゐたかと思ひます。」[58]とある。「志望通りいよいよ明治女學校に入」[59]った黒光は，「これまでゐたミッションに比較すると，これは單なる學校ではなく，まるで青春の道場，といふ氣が」[59]したという。明治女学校から過去を振り返り，中退を重ねたミッション・スクールを見る時，宮城女学校については，「アメリカからお金が來て經營され……何から何までアメリカ式に教育」[60]する「日本の傳統を無視」[61]した学校に，「フエリスでは何か疑問を抱いてをつても，それを口に出してきけば「聖靈をけがすものだ」と他から壓迫される位」[62]狭量は学校に思えた。ミッション・スクールに対するこれらの不満は，その母体である西洋に向けられ，嫌悪の感情は歳月と共に彼女の中で増大し，第二次大戦末期には，「米英撃滅の聖戰」[63]を語らしめるに至る。だがここで黒光が記したミッションとの相違，「青春の道場」とは，邦人による経営や宗教的寛容さと（直接的に）は異なる，教員生徒間の交際についてであった。「まことにそこは嚴肅な青春の道場，學業を授ける受けるの關係を別とすれば，正に人生の男女共學の觀があり，私の僅かな在學中の記憶にあるだけでも，かの人この人と實にロマンスが多く，藤村さんのお輔さんや星野先生の松井さんに於けるやうに『春』のやうな大作の中に書きとゞめられたものを別としても，」[64]「透谷に於ける齋藤お冬さん」[65]「のやうな深刻な話もあるのでした，」[64]「透谷の自殺し

た明治二十七年の五月十七日はまだフエリス在學中で，從つて明治女學校の先生としての透谷を直接に見ることが出來なかつたのは殘念ですが，」[65]「眞面目な戀愛といふと，友達の間でも實に同情の厚かつたもので，秘密でありながらその性質に於ては，公明正大であつたと言へるのであります。當事者同志の敬虔な心持，そして戀愛といふものは決して實行に移してはならない，たゞ我心に深く秘めて，あくまでもその清純を護るべきものであるとし，精神的には超越しても實生活には多くの懐疑をのこしてゐたのが，その時代の戀愛人の心理ともいひませう」[66]。黒光のいう「眞面目な戀愛」とは，「實行に移」さないことにあった。回想の形は取っているが，ここには中村屋サロン時代に黒光が身に付けた戸張のいう（精神的）Hedd Gabler[67][68]の生活習慣が現われている。愛されることを愛した黒光は，若者達を傷付けた。黒光が『木星』に執筆した中村彝の追悼文には，「『一體お母さんはいつでも物慾しさうな顔をしてゐるのが嫌ひだ。』是程深刻直截に私の内面を表現し得る語はない。グイと私の心臓を扶ぐるのである。又かうも言つて私をいぢめた。『お母さんは殘忍性を持つ人だ。餌を見せびらかし人を釣り寄せる。俺れの如うな馬鹿な奴は終ウカと乘つて接近しやうとする。モー駄目サ。埒が設けてあつて，夫より奥へは一歩も足を踏み入らせない。「お前達の這入る場處ではないよ」と冷然としてゐる。いつも此手で追拂はれるのだ。お母さんの如うな惡黨はありやしない。』『私が惡黨なら彝さんだつて立派な惡黨です。ぢやの道蛇の道ぢやないの，あなたは餘り鋭過ぎるワ。丸で剃刀だもの。』斯んな調子でさも憎々しさうに罵り合つた。然し勿論本統の喧嘩にはならない。お互ひに愛あればこその爭ひなんだから。其頃の私達の生活程不思議なものはない。此種の爭闘が激しくなれば成る丈自分達は密接して行つた。そして又爭闘を續けた。」[69]とある。実際には黒光が記す以上に彝は苦しんだが，黒光は「お互ひに愛あればこその爭ひなんだ」という。彼女はこの行為を「所謂プラトニック・ラヴ」と称したのであった。

さて『黙移』に見る黒光の明治女学校観は「宗教學校ではないけれども，やはりキリスト教主義により，嚴肅なうちに思ひ切つた自由があり，藝術至上の精神に實生活に織りこん」[70]だ学校というものであった。また，「明治二十四五年頃は女子教育勃興の機運が最高潮に達した時でありまして，明治女學校のやうな藝術教育があらはれる一方には，所々にミッションスクールが設立され」[60]たとも記している。芸術教育と宗教教育。『黙移』において黒光は，自らの心が「宗教より文學へ」移り行く様をつづっている。だが黒光は，キリスト教の福音につまずいたというよりは人に，ミッション・スクールの外国人教師[71]，先輩[72]につまずいたという方が，事実を語るにふさわしいといえよう。尊敬する友人小平小雪については，「小平小雪さんの信仰熱」と題し，次の様に記している。「突飛な小雪さんが基督教にぐんぐん深入りし，一身をそこに捧げるやうになつたのは植村正久先生の人格に全く傾倒し，そこに自分自身と一致する道を發見したからでありませう。植村先生が明治女學校に來て大いに宗教々育に努められたのは，學校がまだ九段にあつた時分のことであります。小雪さんの時代には先生はもう學校を離れておいでになりました」[73]。「それで小雪さんも先生の一番町教會に出入りして，祈禱會などにも欠かさず出席してゐましたが，或日教會へ行かうと

して途中で，恰度出先きからお歸りのところの先生に出會ひ，御一緒に行くうち，先生が，『明治女學校の文學熱にかぶれてはいけないよ』と言はれたさうで，小雪さんはもとから文學的ではありませんでしたが，それ以來一層文學界系統を嫌ふやうになり，いよいよ植村先生に傾倒しました。私は小雪さんから植村先生のこの言葉をきいたばかりで植村先生の明治女學校觀を云々するなどは輕卒の至りであると思ひますが，藤村透谷の文學界系統に對して，先生が或る苦々しさを抱いてをられたといふことは，さもありさうに考へられ，甚だ興味あることに思ひます。そして植村先生の嚴肅ではあるが包容力の偉大なところ，吃々としてほとばしる熱に感動したのは如何にも小雪さんらしいところであります。」[74]。黒光は，「『女學雜誌』から分れて成つた『文學界』の高踏的な藝術の華々しさ，」[75]「文學界系統」の若い教員の魅力にひかれて明治女学校へ入学した。だがその一方で，彼女は同校の精神が最も高揚した時代は植村が教鞭を執った九段坂下にあり，以後衰退を重ね巣鴨に至ったと考えるようになる。因みに青山は，巌本とキリスト教について，「通説に，巌本は下谷教会で植村正久から洗礼をうけたといはれてゐる程親密であつたが，後年植村との間はよくなかつたやうで，それかあらぬか，巌本もキリスト教から離脱したやうにいはれてゐるやうである。その印象の出所は，相馬黒光の『黙移』や，『黙移』が信頼して依拠してゐる羽仁もと子の『半生を語る』に，源があるのではないか」[76]と推測している。『黙移』の中で黒光は，羽仁について「卒業生中最も大を成した方」[77]と記し，「在學中に親しく接するといふ機會もな」[77]かったこの先輩について，その大半を『半生を語る』から引用している。そして，羽仁先輩が「語られてゐるのには全く同感，「宗教思想はあつても信仰はなかつた」實に私の心が明治女學校に安んせられなくなつたのも，そこであつたのでございます。」[78]と結んでいる。これとは対照的に黒光は「忘れ得ぬ人の一人」[79]として後輩「本荘幽蘭」についても『黙移』に記した。「明治女學校の同窓といつても年代が大分後になり，巣鴨時代といつても没落直前の學校で育つた人であります。」[80]「明治四十年十二月下旬，私が新宿に店を開かうとして準備最中，新聞に「幽蘭女史吉原遊廓角海老樓に身賣をなす」と，でかでかの題目（みだし）で私は驚いて讀み，憮然として考へました。女史の亂行，非常識はいまに初めぬことで，世間ではもう至るところ愛想を盡かされ，淪落の女として顰蹙されてはゐるのですが，根は至つて正直な人で，かつ同じ母校の出身であり，『この人をこのまゝ地獄に落してなるものか，身賣したことあれば私が行つて身受けしよう』と，しかし金はどうする，恰度開店の資として苦心して工面した二百五十圓がありましたので，それを持つて彼女を買ひ戻さうと決心しまし」[81]た。黒光によれば，本荘は「その様子から言葉つきから教育のある女性だといふことが一見あまりに明瞭なので，廢娼運動のまはし者だと疑はれ何處の店もみな怖れをなしてことわつたのだと」[82]いう。黒光は衝撃的な新聞報道に対する真相と，自己犠牲的他者救済の決心を明かす書き方をしたが，「巣鴨に移つてからの明治女學校は殆んどこれといふ人物を生み得なかつ」[79]たと見ている。

1944年（昭和19年），更に黒光は『穂高高原』の中に，碌山は「若きその身が何となくその雰圍

氣に危險を感じること，實際そこでは深山軒も深山の小屋の靜逸を保ちかねること，希望の如く藝術的超越の處とはならず却つて世のつねの愛欲の渦に巻かれて魂の墮落の場所と化しはせぬかと安からぬこと，その昔高唱せられた聖なる戀の理想は現實の自由戀愛と變じて，殊に中心人物に或る年齢の悲劇が感じられること，その靈的魅力のかげにひそむ惡魔的なものを思へば，速くその翼の下から逃げねばならないことを感じるのだと，洋行の原因のおもなものを寧ろそちらにおくかと見へる告白であつた。不同舍の勉強も何となく物足らぬ，といふのは要するにこゝにあるのは西洋美術の稽古であつて，彼の生命に躍動するもの，藝術の眞髄に觸るべくあまりに隔たりがある。これではないこんなものではないのだといふもどかしさで，その魂は既にはるけく放浪し，いちかばちか本家本元を叩いて見ねばやまれぬといふ，寧ろこの旅は海外に目的を持つのでなくて，自分の内部にあるものを確かめるためにはるばる順禮するといふさういふ質のものであつたと考へられる。」[83]と記した。黒光は碌山の「洋行の原因」を，明治女学校での生活と「不同舍の勉強」にあったという。明治女学校については碌山の告白，不同舍については黒光の考察を印象づけている。だが，黒光が記す様な告白を碌山が行なったであろうか。前述の望月は，先の証言につづけて，「碌山さんは海外からずつと手紙をよこされてゐました。碌山さんは歸朝して家へ戻られる時明科驛に降りられて先づ嶌屋へたちよられ一泊されて，私が明治女學校からかわつたことをなじられ明治女學校には高等科もあるからゆくやうに云はれましたがいきませんでした。」[84]と語ったという。ここには明らかに碌山の巌本と明治女学校に対する信頼の姿が現われている。1908年（明治41年）３月11日，碌山は神戸に上陸し，13日に東京の本十宅に着き，２日後郷里へ旅立った。そして「先づ嶌屋へたちよ」ったという。７年の留学の間，碌山は望月の事を気に掛けていたのであろう。14歳の少女は22歳になっていた。碌山の説得は余程強烈であったのか，望月はこの「年の五月結婚をしましたがそれまで婚約に不服だつたもんで一年間もとりきめの話はあつても私は承知はしてゐませんでした。」[85]という。因みに明治女学校は，翌1909年（明治42年）廃校となる。碌山と女学生と巣鴨。「その靈的魅力のかげにひそむ惡魔的なものを思」い描いたのは黒光自身であったとはいえまいか。

第17章　碌山と川井運吉

1901年（明治34年）１月13日，碌山は井口に宛た書簡の中に，「急にも云ふは川井連太郎氏明治女学院寄付金の事に付き近々渡洋いたさるに付，氏と同道いたさんと存候。」[86]と記した。後年井口が『彫刻眞髄』の中に記した碌山の略歴には，明治「三十四年の三月になつて川井運吉氏が明治女學校の資金募集の為めに渡米することになつたが，彼も是非外國へ行つて美術を研究して見たいと思つて居たのであるから一先づ故郷に帰つて父兄の許を受けて同月十三日横濱を出帆した」[87]とある。川井の渡米は碌山にとって，父兄の説得を含め，留学を現実化する絶好の機会となったわけ

だが，碌山は文中運吉を連太郎，女学校を女学院と誤記している。これは突然の好機に対する歓喜，動揺の現われなのか，それともこの１月以前には，面識がなかったため，と考えるべきか。秋山操は，『基督教会（ディサイプル）史』の中に，川井は明治「三六年から明治女学校の教師となった。」[88]と記している。碌山の留学の２年後である。また，明治「三四年，有志の者によりキリスト教新聞の発行計画がたてられ，彼はその資金集めのため三月渡米した。」[88]とあり，川井の渡航目的も碌山の記述とは異なっている。

川井は，「明治二年三月秋田市手形の士族川井兵九郎の次男として生れた。」[89]。1884年（明治17年）10月，「ガルストからの初期の受浸者」[90]となり，17歳の頃「青柳猛（有美）とともにミス・ハリソン（明治一九年七月秋田に着任）のバイブルクラスに出ていたという」[89]。さて，青柳も「明治六年九月秋田市に生まれ，……洗礼は明治二〇年にガルストから受けた。二三年一月京都同志社に入学，二七年文学政治経済科を卒業して秋田に帰郷，なすこともなくしている時，親友川井運吉の知合いであった石川角次郎（当時明治女学校教師）の紹介で二八年九月から巌本善治の明治女学校で倫理と英語を教えることになり」[91]，以後青柳は石川と親しくなった[92]という。石川は，「慶応三年（一八六七）七月，栃木県足利」[93]に生れ，植村正久の感化により入信。明治「二〇年三月渡米し」[94]，渡米中アズビルにより浸礼を受けディサイプルスの会員となる。帰国後の石川について秋山は，「明治二五年九月から二九年五月まで東京成立学舎，東京専門学校，明治女学校，国民英学会などで教え」[94]，「学校教師をするかたわら郷里足利で伝道したが，」[95]，「二九年五月から三〇年八月まで県立岡山尋常中学校の教諭を勤め，……三〇年九月から三六年四月まで学習院教授をし」[96]，「明治三六年ガイ博士が聖学院神学校を創立するに際し，彼は学習院教授の栄職を去って，四月からその教授に就任したのである。彼はキリスト伝の権威で，神学校ではキリスト伝，新約時代，英文学を教えた。ついで三八年一〇月聖学院英語夜学校，三九年九月聖学院中学校が設立されるにおよび，それらの校長として経営に当たった。」[97]と記している。

秋山によれば川井は，「明治二九年四月（二七歳）……明治女学校教師をしていた石川角次郎の世話で小平小雪と結婚し，ただちに足利に赴いて伝道を始めた。」[95]という。「ちょうど，石川が岡山中学に転任することになっていたので，川井は石川の志を継ごうとしたのかも知れない。三一年四月一二日，足利町で足利基督教会牧師川井運吉の司会で，第九回下野基教信徒親睦会が信徒一二〇余名出席の下に開かれ，東京よりは小崎弘道，海老名弾正，巌本善治，片山潜，青柳猛，高木信吉，福田錠二，ガイ，ガルスト夫人らが参加した。」[98]。錚錚たる参加者の中には，巌本，青柳の名も記されているが，青柳は「親友川井運吉が渡米した後の足利教会に毎月一回出張して伝道を助けた。」[99]という。

1901年（明治34年）２月27日，碌山は留学に先立ち受洗した。秋山は，この点について，「川井は明治三四年二月，小石川で荻原守衛（彫刻家，後に高村光太郎とともに著名）に洗礼を施し，同年三月度米の際同行した。」[88]と記している。秋山は，綿密なる調査に基づき，これを記したと推

測出来るが，ここで生ずる疑問は，碌山が受洗とその喜びを報じた３月７日付井口宛書簡及び８日付十重十宛書簡の中に，洗礼司式者名，教会名を記さなかったことにある。前述の井口による碌山略歴にも，この件に関する記載はない。郷里の恩師，親族にも洗礼者名を明かさなかったのは何故なのか。

３月８日の書簡には，「支度の事に付ては青柳，巌本両先生の一方ならぬ御世話様に相成，御礼の言葉も無之候。」[100]とある。碌山をして恐縮せしめた両名の支度の世話とは，如何なるものであったのか。「切符は牧野様の尽力にてとゝのひ申候。」[100]とあり，渡航手続きに関する世話とは考え難い。碌山に川井を引き合わせたのは，青柳，巌本であろうが，単にホノルルまでの同行者として紹介することが世話であったのか。同書簡からは，巌本等が碌山の留学に際し，「基督教信徒たる正式洗礼を」[100]勧めていたことがわかる。言うまでもなく洗礼式は，正教師によって執り行なわれなければならない。巌本，青柳にはこの資格がない。青柳と同郷，同教派の親友川井は「按手礼を受けた」[95]牧師である。この状況から推して，川井以外の牧師が，碌山に洗礼を授けた可能性はまずなかろう。

３月21日，サンフランシスコへ向う香港丸から碌山が井口に宛た書簡には，「海上無事，殊に小生は初めより少しも船酔を感ぜず，其点に於て船中第一等に有之，且つ今まではでは川井先生の室にのみ宿り居り，未だ一度しか下等の食事をなさず，上等の料理に一層肥え太り，日々楽しみと感謝の中に，昼寝のみむさぼり居候間憚りながら御安心被下度候。」[101]とあり，碌山が横浜ホノルル間の航海中，川井の厚意に甘えたことがわかる。では何故，洗礼者に川井の名を記さなかったのであろう。この謎を解く鍵は，やはり黒光にあるのか。

秋山によれば小雪は，明治「二五年に明治女学校に移ったが，その後中退してガイ夫人のヘルパーとなり，同夫人経営の第六天小学校の教師をしていた。」[95]という。ディサイプルスの小学校教師小雪と，ディサイプルスの牧師川井とを，ディサイプルスの石川後の聖学院中学初代校長が引き合わせた訳けだが，秋山は更に，「黒光は川井夫人小雪と宮城女学校時代からの親友，そんな関係から相馬の娘（後のボース俊）は女子聖学院で学んだ。」[88]と記している。俊に関して相馬夫妻は，川井夫妻若しくは夫人に恩があった。だが，前述の「小平小雪さんの信仰熱」の中で黒光は，晩年の川井夫妻について「夫妻」[102]，運吉は「御主人」[102]と，川井運吉の氏名を記していない。しかも「稲戸井」[88][102]村に住んでいることまで熟知の上である。また『碌山のことなど』では，「學校の經営を助けるために明治學院出身の先生で川井運吉といふ人が基金募集にアメリカへ出かけることになつた」[103]と全くの他人の様に記している。これらには，明らかに作為的なものが感じられる。

終章“Love is Art, Struggle is Beauty”

碌山がプロテスタント・キリスト教へ傾倒した背景には，彼のリゴリスティックな性格が，その

要因の一つとして揚げられよう。だがその性格は，厳格な家庭環境というよりも，愛の環境によって培われたものであった。

碌山の女性に対する敬愛の心は，祖母と母そして兄嫁達の献身的な生き方と，それによって彼が受けた惜しみない愛によるところが大きい。

1899年（明治32年）８月28日，求道者碌山の日記には，「昨夜，予は非常に愉快を感ぜり。そは昨日神を少し認めし事を大に悦び，眠に入りしに，予が少しく苦しみつゝある戀愛に付き，神ハ予に満足を与へ給へり。即ち，肉の方を凡て離れて，予の愛する臼彦嬢とやはり靈に於て楽しく，清く，共に遊びし夢にてぞある。」[104]とある。碌山「が少しく苦しみつゝある戀愛」の相手は黒光であったといわれている。「臼彦嬢」とは，当時13歳の臼井彦代のことである。碌山は，自分の関心を純真な少女へふりむけ，問題回避を試みたのだとも考えられている。何れにせよ，彼はこの夢を天啓と信じた。因みに27日の日記には，「静に求安録を見る事なれば，予の神を求むるの心此日非常に楽しき感あり。神予の靈を下し給ふ如く感じて，何となく新生命を受けし如き心持し，」[105]とある。キリスト教への接近の中で，彼の人生の捕らえ方は，宿命から摂理へと変化し，そして肉の思いに対する霊の力，これが碌山生涯の戦いとなって行く。

無論碌山は，女性のみを愛した訳けではない。彼の愛は，全ての弱者に向けられている。碌山の死後，黒光が寄せた追悼文には，「彼は少年時代に虚弱であつたので誰の病気に対しても深い同情を持ち痒い所に手の届く様に世話をした，彼と前後して死んだ我が二男のジョージの病中は其の実父母にも勝りて昼夜看護をして呉れ亦次女千香が病院通をした時なども九月から十二月迄四ヶ月に渡る間一回も欠かさず病院迄同道してくれ我々を一度も煩はしたことがない時々気の毒になつて止ると却て機嫌を損じて「僕は元来利己的で自我一天張りだから人の為めにするのではない只自己を満足させるのだから余計なことは云つて貰ひ度くない」といふのであつた。」[106]と記されている。「利己的で自我一天張り」。黒光の記憶が正しければ，ここに碌山の自己認識があったといえよう。だが碌山「を満足させる」ものは偽善ではない。また贖罪の為の善行でもない。彼はただこの幼子たちを愛したのであった。この追悼文が書かれてから四半世紀後，黒光は著書『黙移』續篇の中に，次の様に記した。「碌山の死の直前，三月二十八日に次男襄二が亡くなりました。如何なる縁か碌山は大層この兒を可愛がりまして，よく世話をしてくれました。子供の方でも大好きなオヂチヤンで，末期の水もオヂチャンにと云つて唇をしめしてもらひました。」[107]。幼子は，自分を愛する者を知っていた。その後，「墓地の撰定から葬式後の回礼迄悉く我々に代つてつとめた，不思議なことにはジョージを葬つた側に彼は自分の為めだとて特に一坪の余地を買て置た」[108]という。襄二が寂しくないように。これが「利己的で自我一天張り」を自認する男の生き様であった。

“love is art, struggle is beauty.”これはまことに碌山の思想の中核，信仰の証しであった。Love is art は，struggle is beauty の条件である。愛なくば全ては虚しい。God's love is art, Therefore,

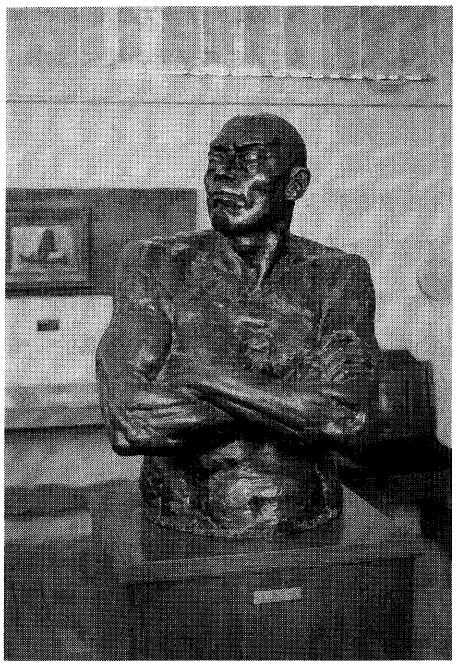

写真５　「文覚」ブロンズ
「碌山美術館所蔵」

our struggle is beauty. 碌山の心中には，この様な思いがあったであろう。そして，この神の愛が，霊と肉体の存在である人にはたらいて，人も愛の業を行なうことが可能になると信じたであろう。碌山は，神の試練によって人は生かされると信じた。試練からの逃避は救いをもたらさない。神の試練の中で，人は如何に生きるか，ここの碌山の struggle の意味があった。

碌山の日本での仕事は，この struggle の造形化にあったと言えよう。彼はその第一作に，そのまま「ストラツグル」という題を付けた。だがその作品は「何時の間にかミケランヂエロの奴隷（スレーブ）と云ふやうになつてしまつて……壊してしまつた」(109) という。模倣を否定する碌山にとって，これは当然の行動のように思えるが，前述の「デスペア」のみならず，意図的ではないにせよ，碌山の作品の中には，巨匠の作品に似類するものが見受けられる。では何故，碌山は「ストラツグ」を壊してしまったのであろう。ミケランジェロの作品に似てしまっただけの理由なのか。「奴隷」に似てしまったからではないのか。碌山の美しい struggle は，slave の struggle ではない。自由人の struggle である。即ち，他人によって自分（の心）が支配される struggle ではなく，神によって，それらから開放される信頼の struggle である。

この後も碌山は struggle のかたちを模索し続けた。「文覚」（写真５）「デスペア」「女」は碌山の struggle の像であり，これらの作品には，その時々の彼の心の在り様が見事に現われている。

鎌倉成就院の文覚像を見た碌山はそのプリミティヴさに感動したのだという。だが黒光の回想には「文覺と共通な惱を碌山は持つてゐましたからそれを見て『文覺』の制作をやつたのでした。」(6) とある。袈裟御前と遠藤盛遠，自分と碌山ということになる。この頃碌山が平静を失なったのは，彼の置かれた逆境が，試練によるものではなく，罪の報いによるのではないかと感じたからではないか。「文覚」の制作中「碌山はストラッグル・イズ・ビューティーと云つたものです。」(6) と黒光は記している。彼はこれも試練であると信じたかったのであろう。だが歴史上の人物と自己の同一化，美化，正当化は碌山の問題の解決とはならなかった。作品は，外剛内柔なる傲慢の絶望像となった。碌山の書簡には，「厭々ながらやつたのが此頃の展覧會の『文覺』で三賞といふ恭い御褒美を頂いた。」(8) とあったと光太郎は記している。自力の限界。碌山は，気も狂わんばかりの混乱の中で自らの絶望の像「デスペア」の制作へ踏み切ったのであった。

「デスペア」は見事な失敗作となった。そこには碌山が体得した芸術的能力の全てが無力化して

いる。これは作られたデスペア，架空の絶望ではなかった。ここには，「文覚」の様な見栄はない。そして彼はついに「信頼の絶望」像「女」へと辿り着くのであった。「女」，この絶望の像には救いがある。美しい struggle の姿がある。

“Love is Art, Struggele is Beauty.” 確かにロマンティックな響きを持った言葉である。加えて戦後の黒光の発言は，明治ロマンティシィズムを印象付けるものとなった。碌山は，恋愛自体を否定した訳けではない。正しい男女の交際を美しいと考えた。だが（故に）黒光との関係を正しいと考えることは出来なかった。この言葉は，決して道ならぬ恋の賛美ではない。これを感傷的，情緒的に捕らえるべきではない。碌山はこの言葉通り生きた作家であり，絶作「女」には，彼の生き方が現われている。

注

(1) 高村光太郎「死んだ荻原君」，『彫刻眞髄』，209頁。
(2) 石井鶴三「彫刻の先覺荻原碌山」，『彫刻家　荻原碌山』，68頁。
(3) 笹村草家人「碌山攷」，『彫刻家　荻原碌山』，76頁以下。
(4) 相馬黒光「碌山のことなど」，『彫刻家　荻原碌山』，33頁。
(5) 笹村草家人「碌山余話」，『笹村草家人文集　上巻』，75頁。
(6) 相馬黒光「碌山のことなど」，『彫刻家　荻原碌山』，23頁。
(7) デスペヤのモデル　相馬黒光談，昭和29年８月の談話，『彫刻家　荻原碌山』，206頁。
(8) 高村光太郎「死んだ荻原君」，『彫刻眞髄』，210頁。
(9) デスペヤのモデル　相馬黒光談『彫刻家　荻原碌山』，205頁。
(10) 本田功「碌山の追憶」，『彫刻家　荻原碌山』，46頁。
(11) 高村光太郎「荻原守衛」，『詩洋』第百輯記念號，昭和11年10月，42頁。
(12) 高村光太郎「死んだ荻原君」，『彫刻眞髄』，210頁以下。
(13) 二度目のデスペヤ　三原清一談，昭和29年９月27日の談話，『彫刻家　荻原碌山』，205頁。
(14) 大木英夫「義にして同時に罪人」，『形成』７月号，1993年，３頁。
(15) 杉井六郎（注解および編）・荻原守衛『碌山日記』，同朋舎出版，1980年，201頁。
(16) 杉井（編）・荻原，前掲書，206頁。
(17) 笹村草家人「碌山余話」，『笹村草家人文集　上巻』，86頁。
(18) 相馬黒光『黙移』續篇，308頁。
(19) 相馬安雄（編）・相馬黒光『滴水録』，相馬安雄，昭和31年，序文。
(20) 女のモデル　相馬黒光談，昭和29年７月の談話，『彫刻家　荻原碌山』，216頁以下。
(21) 相馬黒光「碌山のことなど」，『彫刻家　荻原碌山』，24頁。
(22) 相馬，前掲書，24頁以下。
(23) 黒光との戀愛　書翰，保田龍門，昭和30年２月笹村草家人宛，『彫刻家　荻原碌山』，252頁。
(24) 淀井敏夫「碌山美術館と私」，『碌山美術館報』第13号，平成４年，15頁。
(25) 津田青楓による「女」のモデルの話，『彫刻家　荻原碌山』，251頁。
(26) 高村光太郎「死んだ荻原君」，『彫刻眞髄』，211頁。
(27) 齋藤與里「荻原守衛君の追懐」，『彫刻眞髄』，218頁。
(28) 戸張狐雁「故荻原守衛君に就て」，『彫刻眞髄』，206頁。
(29) 石井鶴三「荻原碌山の彫刻について」，『信濃教育』，２月號，昭和28年，14頁。

(30) 戸張孤雁「碌山を憶ふて彫刻界の現狀に及ぶ」,『孤鴈遺集』, 40頁。
(31) 笹村草家人「碌山余話」,『笹村草家人文集　上巻』, 87頁。
(32) 石井鶴三「彫刻の先覺荻原碌山」,『彫刻家　荻原碌山』, 59頁以下。
(33) 荻原守衛「公設展覧會評」,『彫刻眞髄』, 120頁。
(34) 荻原守衛「彫刻藝術の大勢」,『彫刻眞髄』, 71頁。
(35) 与謝野寛「ロダン翁を訪ふ（四）」(「東京朝日新聞」明治45年７月17日第６面掲載)。
(36) 戸張孤雁「現時の彫刻界」,『孤鴈遺集』, 182頁。
(37) 深山孝彰「戸張孤雁の芸術とその意義」,『戸張孤雁と大正期の彫刻』, 愛知県美術館, 1994年, ９頁。
(38) 戸張孤雁「彫刻界の三論」,『孤鴈遺集』, 36頁。
(39) 戸張, 前掲書, 37頁参照。
(40) 戸張孤雁「彫刻界の現狀を論ず」,『孤鴈遺集』, 122頁。
(41) 笹村草家人「碌山と光太郎」,『笹村草家人文集　上巻』, 132頁。
(42) 笹村草家人「あとがき」,『彫刻家　荻原碌山』, 305頁。
(43) 長兄十重十の次女, 碌山の姪である。
(44) 荻原考子「碌山館の頃の思い出」,『碌山美術館報』第９号, 昭和63年, ６頁。
(45) 荻原守衛「仏蘭西の美術学生」,『荻原守衛の人と芸術』, 114頁。
(46) 荻原守衛「迷へる青年美術家」,『彫刻眞髄』, 86頁参照。
(47) 杉井六郎（注解および編）・荻原守衛『碌山日記』, 260頁。
(48) 荻原守衛「書簡」,『荻原守衛の人と芸術』, 212頁。
(49) 荻原, 前掲書, 229頁。
(50) 荻原, 前掲書, 243頁。
(51) 嶌屋の菊のさん　望月菊の談, 昭和29年10月の談話,『彫刻家　荻原碌山』, 134頁。
(52) 荻原守衛「書簡」,『荻原守衛の人と芸術』, 242頁。
(53) 松井（小山）菊野。明治女学校絵画教師松井昇の三女。明治女学校に学び, 後に不同舎で絵画を学んだ。松井家はクリスチャンホームであり, 碌山は家族ぐるみの交わりを持っていた。
(54) 中村秋一「荻原守衛（三）」,『畵論』九月號, 昭和18年, ７頁。
(55) 青山なを『明治女学校の研究』, 慶應通信, 昭和45年, 668頁。
(56) 青山, 前掲書, 671頁。
(57) 青山, 前掲書, 665頁。
(58) 相馬黒光『默移』, 83頁。
(59) 相馬, 前掲書, 103頁。
(60) 相馬, 前掲書, 12頁。
(61) 相馬, 前掲書, 13頁。
(62) 相馬, 前掲書, 66頁。
(63) 相馬黒光『穂高高原』, 女性時代社, 昭和19年, あとがき, ２頁。
(64) 相馬黒光『默移』, 107頁。
(65) 相馬, 前掲書, 96頁。
(66) 相馬, 前掲書, 108頁。
(67) 相馬, 前掲書, 309頁参照。
(68) 相馬黒光「碌山のことなど」,『彫刻家　荻原碌山』, 24頁参照。
(69) 相馬黒光「新宿時代の彝さん」,『木星』中村彝追悼號, 第二巻第二號, 木星社, 大正14年, 48頁。
(70) 相馬黒光『默移』, 38頁。
(71) 相馬, 前掲書, 36頁参照。
(72) 相馬, 前掲書, 34頁以下参照。
(73) 相馬, 前掲書, 139頁。
(74) 相馬, 前掲書, 140頁。

(75) 相馬，前掲書，38頁以下。
(76) 青山なを『明治女学校の研究』，667頁。
(77) 相馬黒光『黙移』，130頁。
(78) 相馬，前掲書，136頁。
(79) 相馬，前掲書，128頁。
(80) 相馬，前掲書，125頁。
(81) 相馬，前掲書，126頁。
(82) 相馬，前掲書，127頁。
(83) 相馬黒光『穂高高原』，202頁以下。
(84) 嶌屋の菊のさん，望月菊の談，『彫刻家　荻原碌山』，134頁以下。
(85) 望月，前掲書，135頁。
(86) 荻原守衛「書簡」，『荻原守衛の人と芸術』，234頁。
(87) 井口喜源治「碌山荻原守衛氏略歴」，『彫刻眞髄』，191頁。
(88) 秋山操『基督教会（ディサイプルス）史』，基督教会史刊行委員会，昭和48年，631頁。
(89) 秋山，前掲書，629頁。
(90) 秋山，前掲書，477頁以下。
(91) 秋山，前掲書，643頁。
(92) 秋山，前掲書，644頁参照。
(93) 秋山，前掲書，638頁。
(94) 秋山，前掲書，639頁。
(95) 秋山，前掲書，630頁。
(96) 秋山，前掲書，640頁。
(97) 秋山，前掲書，641頁。
(98) 秋山，前掲書，478頁。
(99) 秋山，前掲書，644頁。
(100) 荻原守衛「書簡」，『荻原守衛の人と芸術』，237頁。
(101) 荻原守衛，前掲書，238頁。
(102) 相馬黒光『黙移』，141頁。
(103) 相馬黒光「碌山のことなど」，『彫刻家　荻原碌山』，19頁。
(104) 杉井六郎（注解および編）・荻原守衛『碌山日記』，226頁以下。
(105) 杉井（編）・荻原，前掲書，225頁。
(106) 相馬黒光「家庭に於ける荻原オジサン」，『彫刻眞髄』，193頁。
(107) 相馬黒光『黙移』續篇，305頁。
(108) 相馬黒光「家庭に於ける荻原オジサン」，『彫刻眞髄』，200頁。
(109) 荻原守衛「談片」，『彫刻眞髄』，77頁。